OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	フローベールと仏教
Author(s)	金﨑, 春幸
Citation	言語文化研究. 2015, 41, p. 47-64
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/51424
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

フローベールと仏教

金　﨑　春　幸

Flaubert et le bouddhisme

KANASAKI Haruyuki

Summary: Cet article a pour objectif de montrer les rapports de Flaubert au bouddhisme. Une de ses lettres de 1846 rend compte de la parole du « Pratyêka Bouddha », qui ne peut opérer que son salut personnel d'après l'explication de Burnouf dans son *Introduction à l'histoire du bouddhisme indien*（1844）. La sympathie de l'écrivain pour ce « Bouddha individuel » se retrouve chez le gymnosophiste apparu dans *La Tentation de Saint Antoine*（1874）, tandis que le Bouddha qui apparaît au défilé des Dieux dans cette œuvre reflète le débat sur la rivalité entre le christianisme et le bouddhisme dans les années 1860. Le même sujet de débat se trouve d'une manière plus comique dans le 9e chapitre de *Bouvard et Pécuchet* où Pécuchet déclare qu'il se fera bouddhiste devant les gens de Chavignolles, dont les réactions reprennent les critiques de Barthélemy-Saint-Hilaire contre le bouddhisme.

キーワード：フローベール　仏教　文学と宗教

クロワッセにあるフローベール記念館には，作家が愛用していたペンやインク壺などが陳列されているが，そのような遺品のなかに小さなブッダの像がある[1)]。この仏像について，フローベールは1879年 6 月に，姪のカロリーヌ宛ての手紙で，「私のブッダに生じた損傷により，悲しみに暮れています。台座の角が壊れ，腕の羽根がなくなってしまいました。羽根はどこにあるのでしょう」と，大事にしていた仏像が壊れてしまったことを嘆いている[2)]。翌年の 5 月にも「私のブッダの修理を頼むのを忘れないでください」と，同じカロリーヌに書き送っている[3)]。「私のブッダ」とフローベールが呼ぶ像を彼がどのようにして手に入れたのかは分からないが，仏像への愛着は手紙の文面から容易に見て取れる。キリスト像や聖母マリア像などへの言及は彼の書簡では見られないだけに一層，仏像に対するこだわりは際立っている。

1）フローベール記念館（Pavillon Flaubert）に収められたこの仏像の写真は，作家の肘掛椅子やパイプなどとともに，『アルボム・フローベール』に掲載されている：*Album Flaubert*, Iconographie réunie et commentée par Jean Bruneau et Jean A. Ducourneau, Gallimard, 1972, p. 174.

2）« Je me suis bien attristé par des avaries advenues à mon Bouddha. Un coin du piédestal est brisé, et une aile des bras partie. — Où est le morceau ? »（Flaubert, *Correspondance*, Tome V, Édition présentée, établie et annotée par Jean Bruneau et Yvan Leclerc, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 2007, p. 652）. 以下，プレイアード版のフローベール書簡集を *Corr*. と略記する。

3）« N'oublie pas de faire réparer mon Bouddha »（*Corr*., Tome V, p. 859）.

フローベールの作品には仏像はあらわれないものの，1874年に刊行された『聖アントワーヌの誘惑』において神々の列のなかにブッダが登場するし，遺作の『ブヴァールとペキュシェ』ではペキュシェはシャヴィニョルの人々の前で自分は「仏教徒になる」と宣言する。もちろん，作品のなかでブッダや仏教への言及があるからといって，作家が仏教に対して特別の興味があったとか，信仰があったとかいうことにはならない。姪のカロリーヌ宛ての手紙にあらわれた仏像への愛着も，宗教的な意味合いがあるとも考えられるし，単なるフェティシズムのあらわれとも考えられる。あるいはそこに一種の東洋趣味を読み取ることもできるかもしれない。

フローベールが仏教に対してどう考えていたかを明らかにするためには，彼が仏教に関してどういう書物を読み，読書ノートや書簡などにどのように記していったのかを検証していかなければならない。その上でフローベールの仏教観を探っていきたい。

フランスにおける仏教

フローベールと仏教との出会いについて述べる前に，19世紀に至るまでのフランスにおいて仏教がどのように捉えられていたかを簡単に述べておく必要があるだろう[4)]。

紀元前５世紀にインドで誕生した仏教は，ほぼ1500年にわたって発展し，アジア各地に広がっていったのだが，インドでは４世紀ごろから次第に衰退し，12世紀ごろにほぼ消滅してしまう。17世紀から18世紀にかけてインドに進出したフランス人やイギリス人にとって仏教はすでに滅びた存在であり，仏教の経典もインドには見当たらなかった。一方，中国，日本，東南アジアなどに広まった仏教については，中世･ルネッサンス期の旅行者による旅行記や見聞録，また16世紀からはイエズス会を中心としたキリスト教布教活動における宣教師たちの報告書や書簡が，ヨーロッパの人々になにがしかの情報をもたらした。しかし，さまざまな情報が錯綜する状況で，受け手の側が，仏教について一貫性をもった理解をすることは不可能と言ってよかった。

その例を，18世紀にディドロとダランベールらによって編纂された『百科全書』で見てみよう[5)]。『百科全書』では« Bouddhisme »や« Bouddha »は見出しの項目としては存在せず，アジアやインドにかかわるいくつかの項目に仏教に関する情報が分散している。« Asiatiques »では，ケンペルの説を引いて，シャカはもともとアフリカ人で，エジプト人の哲学や神秘的な教義のなかで育ったとあるし[6)]，« Chacabout ou Xacabout »には，シャカはユダヤ人であるか，ある

4）フランスにおける仏教の受容については，以下の研究書を参考にした：Henri de Lubac, *La rencontre du bouddhisme et de l'Occident*, Aubier, 1952 ; Roger-Pol Droit, *Le culte du néant : Les philosophes et le Bouddha*, Seuil, 1997. また，仏教用語や経典については，以下の事典を参照した：Philippe Cornu, *Dictionnaire encyclopédique du bouddhisme*, Nouvelle édition augmentée, Seuil, 2006.

5）*Encyclopédie ou dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers*, Nouvelle impression en facsimilé de la première édition de 1751-1780, Stuttgart-Bad Cannstatt, Friedrich Frommann Verlag, 1988, 35 vols. 以下，『百科全書』を *Encyclopédie* と略記する。

6）« Kempfer conjecture que ce chef de secte（=Xekia）étoit Africain, qu'il avoit été élevé dans la Philosophie & dans les mystères des Egyptiens »（*Encyclopédie*, Tome I, p. 755）.

7）« Quelques-uns croyent que Xaca étoit Juif, ou du moins qu'il s'étoit servi de leurs livres »（*Encyclopédie*, Tome III, p. 3）.

いはユダヤ人の書物を用いたとされているし[7]，« Indiens »では，裸形仙人（ジムノソフィスト）のなかにブッダの名前がある[8]。また，« Siaka »の項目には，「この宗教には殉教者がいて，彼らは自分たちの神々の意にかなうように自ら死を選ぶ」と書かれている[9]。これらは互いに矛盾し合う聞き書き，仮説，誤解の寄せ集めであって，啓蒙思想家たちの批判精神はここには及んでいない。1784年，インドに判事として赴任していたウィリアム・ジョーンズがベンガル王立アジア協会を主宰するようになってから，サンスクリット語研究やインド文化研究はヨーロッパで盛んになっていくのだが，その時期でも，すでに600年ほど前にインドから消滅していた仏教はその姿を知られないままであった。

ヨーロッパ世界が仏教を真の意味で発見したのは，サンスクリット語の経典が発見され，基本的な文献が翻訳され始めた1820年以降のことである。1820年代に，ブライアン・ホートン・ホジスン（1800-1894）がサンスクリット語で書かれた仏教経典をネパールで発見し，ウージェーヌ・ビュルヌフ（1801-1852）がパーリ語を解読する。同時期に，漢籍の仏典もジャン・ピエール・アベル・レミュザ（1788-1832）によって研究が進められていった。

フランスにおいて，仏教に関する学術的研究で決定的な役割を果たしたのは，ウージェーヌ・ビュルヌフである。彼は1837年にネパールのホジソンのもとから送られたサンスクリット語経典写本24巻の解読に没頭し，その分析と考察を1844年に『インド仏教史序説』としてまとめあげた[10]。650頁近いこの大著は，ビュルヌフの死後出版された法華経のサンスクリット原典からのフランス語訳およびその注解とともに，19世紀フランスにおける仏教観に大きな影響を与えることになったのである。

フローベールと仏教の出会い

1845年の春に，フローベールは初稿『感情教育』を書き終えた後，「オリエントの物語」の構想を始める[11]。それまでの初期作品がいわば筆の赴くままに書きすすめられたのに対し，この物語は，少なくも18ヵ月の間，文献を読み，セナリオを練った[12]，彼としては初めて事前の準備をした作品であった。「仏教」という語がフローベールの書簡のなかで最初にあらわれるのは，この「オリエントの物語」を準備している1846年5月，マキシム・デュ・カン宛ての手紙においてである。

8）« Buddas, Dandanis, Calanus & Iarcha, sont les plus célèbres d'entre les Gymnosophistes dont l'histoire ancienne nous a conservé les noms »（*Encyclopédie*, Tome VIII, p. 675）.

9）« Cette religion a ses martyrs, qui se donnent une mort volontaire, dans la vue de se rendre agréables à leurs dieux »（*Encyclopédie*, Tome XV, p. 148）.

10）Eugène Burnouf, *Introduction à l'histoire du buddhisme indien*, Imprimerie royale, 1844. ビュルヌフはブッダを« Buddha »というように，サンスクリット語をラテン文字に転写したままに表記しているので，表題の「仏教」も« bouddhisme »ではなく，« buddhisme »となっている。

11）「オリエントの物語」の表題は『イスラム教修道僧の7人の息子』（*Les Sept Fils du derviche*）。セナリオがジャン・ブリュノーの『フローベールの「オリエントの物語」』に掲載されている（Jean Bruneau, *Le « Conte Oriental » de Flaubert*, Denoël, 1973, pp. 95-118）。

12）1846年8月12日のルイーズ・コレ宛書簡に「僕が18ヵ月間考えているオリエントの物語…」とある（Flaubert, *Correspondance*, Tome I, Édition établie, présentée, et annotée par Jean Bruneau, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1973, p. 296）。

Enfin vers la trentaine je verrai, d'ici là j'apprends la grammaire grecque et j'étudie le buddhisme. Je vis seul, très seul, de plus en plus seul. Mes parents sont morts. Mes amis me quittent ou changent : « Celui, dit Çakya-Mouni, qui a compris que la douleur vient de l'attachement se retire dans la solitude comme le rhinocéros. » Je t'expliquerai le sens du mot « attachement » qui est tout spécial[13].

（とにかく30歳になるころには分かるだろうが，今からそのときまで僕はギリシア語文法を学び，仏教を研究する。僕は孤独に，とても孤独に，ますます孤独に生きている。近親の者たちは死んでしまった。友人たちは僕から去るか，あるいは変わってしまった。シャカムニは「苦しみが愛着から生じることを理解した者は犀のように孤独のなかにひきこもる」と言っている。「愛着」という語は特殊な意味なので，そのうち君に説明するよ。）

24歳のフローベールは，同じ手紙のなかで「いつか僕が一行でも印刷させることがあるかどうか疑いをいだくことがよくある」といったように[14]，自分の作家としての資質に自ら疑問を投げかけつつも，とにかく30歳になるまではギリシア語と仏教を研究しようとまず述べる。そして，この年の1月に父親を，3月に妹を亡くして，孤独感をつのらせるフローベールは，ウージェーヌ・ビュルヌフ『インド仏教史序説』の一節を引用して[15]，孤独な気持を友人に伝えようとする。「オリエントの物語」の準備のために読んだ本は，この『インド仏教史序説』のほかにも，バガヴァッド・ギーター，リグ・ヴェーダ讃歌，マヌ法典，コーランなどがあるが[16]，とりわけビュルヌフの研究書の一節がフローベールの心を惹いたのであろう。ビュルヌフはこの本のなかでさまざまなスートラ（経典）を整理・分類しながら，『カナカヴァルナのスートラ』をフランス語に訳しているのだが，このスートラのなかで「プラティエーカ・ブッダ」が語る言葉として「求めることから愛着が生じ，愛着からこの世では苦しみが生じる。苦しみが愛着から生じることを認めた者は，犀のように孤独のなかにひきこもる」が出てくる[17]。「プラティエーカ・ブッダ」とは「個人的なブッダ」のことであり，ビュルヌフも脚注でこれは「自分の個人的な救済をおこなうことしかできず，生きとし生けるものに恵みを与えるあの偉大な慈悲の情に達するわけではない」と説明している[18]。つまり，「犀のように孤独のなかにひき

13）*Corr*., Tome I, p. 265.
14）« Je doute bien souvent si jamais je ferai imprimer une ligne »（*Corr*., Tome I, p. 265）.
15）この一節がビュルヌフ『インド仏教史序説』からの引用であることは，ジャン・ブリュノーがプレイアード版書簡集の注で指摘している（*Corr*., Tome I, p. 977, note 2）。
16）1846年9月15日のエマニュエル・ヴァス・ドゥ・サントゥアン宛書簡で，フローベールは「オリエントの物語」のために読んだ本を挙げている：« J'ai lu le Baghavad-Gitâ, le Nalus, un grand travail de Burnouf sur le Buddhisme, les hymnes du Rig-Véda, les lois de Manou, le Koran et quelques livres chinois ; voilà tout »（*Corr*., Tome I, p. 344）.
17）« Alors le bienheureux Pratyêka Buddha [...] prononça dans ce moment la stance suivante : « De la recherche naît l'attachement, de l'attachement naît en ce monde la douleur : que celui qui a reconnu que la douleur provient de l'attachement, se retire, comme le rhinocéros, dans la solitude »（Burnouf, *op. cit*., p. 94）.
18）« [...] le Pratyêka Buddha est un être [....] qui, suivant l'expression de M. A. Rémusat, "ne peut opérer que son salut personnel, et auquel il n'est pas donné d'atteindre à ces grands mouvements de compassion qui profitent à tous les êtres vivants" »（Burnouf, *op. cit*., p. 94, note 1）.

こもる」ブッダは「個人的な救済」の境地に達したブッダであって，衆生を救うブッダではない。フローベールはそのことも理解した上で，ブッダの境地を自ら置かれた心的状態に合わせて，共感したのであろう。

「オリエントの物語」はセナリオがつくられただけで，下書き原稿が執筆されることはなく，1847年頃からフローベールの関心は『聖アントワーヌの誘惑』の作成に向かう。1848年5月から1849年９月まで執筆されたこの『聖アントワーヌの誘惑』第１稿にはブッダは登場しないし，仏教にかかわる語も出てこないが，執筆前につくられた読書ノートには「ブッダ」と題された箇所がある。フランス国立図書館でN.a.fr. 23671という整理番号をつけられた草稿に神々に関する読書ノートがあり，そのなかに「インド」と題された６頁にわたるノートがある[19]。「ブッダ」についての記述は，その最後の40行を占めている。前半部分を見てみよう。

Buddhâ − (indistinct des castes − miracles − prédication.)
Miracles. − pluie d'aliments, de sucre candi, de mélasse, de poisson
Les dieux brahmaniques sont soumis au Buddhâ − le type supérieur à tout. L'espérance que Cakyamouni apportait, c'était la possibilité d'échapper à la renaissance par le Nirvana. Le buddhiste recherche les plus rudes épreuves pour en faire partager le salut aux hommes − un jeune buddhiste se donne à une tigresse affamée qui vient de mettre bas. [...][20]

（ブッダ。（カーストを区別しない。奇蹟。予言。）
奇蹟。食べ物の雨，氷砂糖や糖蜜や魚の雨。
バラモン教の神々はブッダに従属している。あらゆるものより優れた方。シャカムニがもたらした希望は，ニルヴァーナによって再生から逃れる可能性である。仏教徒は人々に救済を分かち与えるために，この上なく厳しい試練を求める。若い仏教徒はお産をしたばかりの飢えた虎に身を投げる。[…]）

ブッダという表題の後に，キーワードのようなものが３つ並ぶ。続く19行はビュルヌフの『インド仏教史序説』からの引用あるいはレジュメである[21]。まず，ブッダが食べ物の雨を降らせた奇蹟[22]，次にブッダがバラモンの神々に優越すること[23]，ブッダがニルヴァーナ（寂滅）によって再生（輪廻）から逃れる道を示したこと[24]，ブッダの弟子は飢えた虎に身を投げるほど

19）Bibliothèque nationale de France, Nouvelles acquisitions françaises（以下，BnF, N.a.fr. と略記）23671, f° 179, 179v°, 181, 181v°, 180, 180v°.
20）BnF, N.a.fr. 23671, f° 180. フローベールはブッダを« Buddhâ »と書いたり，« Buddha »と書いたりしているが，転写では統一せずにそのまま再現している。シャカムニ« Cakyamouni »などについても同様である。
21）ジャン・セズネックはこの読書ノートの前半の数行について言及していて，それらがビュルヌフの『インド仏教史序説』に基づいていることを指摘している：Jean Seznec, *Les Sources de l'épisode des dieux dans* La Tentation de saint Antoine (*Première version, 1849*), Vrin, 1940, p. 40.
22）« Ce jour-là même, à la seconde moitié de la journée, il tomba une pluie d'aliments et de mets de diverses espèces »（Burnouf, *op. cit*., p. 97）.
23）« [...] les auteurs des légendes ont pu croire qu'un Buddha était supérieur, en cette vie même, aux plus grands des Dieux reconnus de son temps dans l'Inde, à Brahmâ et à Indra »（Burnouf, *op. cit*., p. 134）.
24）« L'espérance que Çâkyamuni apportait aux hommes, c'était la possibilité d'échapper à la loi de la transmigration, en entrant dans ce qu'il appelle le Nirvâna, c'est-à-dire l'anéantissement »（Burnouf, *op. cit*., p. 153）.

過酷な試練を自らに与えること[25]，などが記される。

21行目からは別の文献から引かれている。

> Le soleil est habité par un adorateur de Buddha. Les murs et les treillis de ce palais sont ornés d'or, d'argent, de saphir. Il est cubique, cinq tourbillons de vent l'entraînent autour des quatre continents sans lui permettre de s'arrêter jamais [...][26] .
>
> （太陽にはブッダの崇拝者が住んでいる。この宮殿の壁や格子は金や銀やサファイアで飾られている。宮殿は立方体で，五つのつむじ風が四つの大陸のまわりで引っ張って，宮殿が決して止まらないようにしている。[…]）

この箇所の出典は，中国学者アベル・レミュザの「中国の著者による仏教徒の宇宙形状および宇宙創成に関する試論」である[27]。仏教の宇宙論（コスモロジー）では，宇宙の中心にあるのはスメール山（須弥山）であり，太陽がその山の中腹のまわりを回っている。ここでは太陽のなかにある宮殿とそれを取り巻く五つのつむじ風のことが描かれており[28]，この後，スメール山の中腹より上の世界の描写がなされる。これらはどう見ても一つの宇宙神話であり，歴史上のブッダ（シャカムニ）とは直接結びついてはいない。

アベル・レミュザの文献の引用が19行続いた後，ノートの最後は次のようになっている。

> Représentations du Buddha. ~~nu~~, noir, cheveux courts, frisés, bonnet pyramidal, ornemens aux oreilles.
>
> （ブッダの表象。黒くて，短い髪，巻き毛で，ピラミッド形の帽子，耳に飾り。）

このブッダの外観は，クロイツェルの『古代の宗教』（ギニョーによるフランス語訳注）第１巻第１部で記述されているものである[29]。この描写は一見18世紀の『百科全書』に記されたアフリカ起源説を想起させるものがあるが，ギニョーが脚注に示している通り，肌の黒さはインドの神クリシュナやヴィシュヌと同じであるし，「短い髪，巻き毛」も仏教やジャイナ教の僧侶や隠者の髪である[30]。クロイツェルおよびギニョーの記述は，バラモン教ではブッダはヴィ

25）« Un jeune Brahmâne, qui s'est retiré au fond d'une forêt, pour se livrer, dans l'intérêt des êtres vivants, à une pénitence extraordinaire, donne son corps en pâture à une tigresse affamée, qui venait de mettre bas »（Burnouf, *op. cit*., p. 159）.

26）BnF, N.a.fr. 23671, f° 180v°.

27）J. P. Abel Rémusat, « Essai sur la cosmographie et cosmogonie des Bouddhistes, d'après les auteurs chinois », in *Mélanges posthumes d'histoire et de littérature orientales*, Imprimerie Royale, 1843, pp. 65-131.

28）« Le soleil est habité par un adorateur de Bouddha [...]. Il habite un palais dont les murailles et les treillis sont ornés d'or, d'argent et de saphir [...] ; il est, par conséquent, de forme cubique, et c'est l'éloignement qui le fait paraître rond. Cinq tourbillons de vent entraînent continuellement ce palais autour des quatre continents, sans lui permettre jamais de s'arrêter [...] »（Abel Rémusat, *op. cit*., p. 83）.

29）« Du reste il est ordinairement nu et de couleur noire ; ses cheveux courts sont artistement relevés en boucles et frisés autour de sa tête [...] ; parfois encore s'élève au-dessus de sa chevelure frisée une espèce de bonnet pyramidal. Ses oreilles sont excessivement allongées par le poids des ornemens qui les surchargent [...] »（Frédéric Creuzer, *Religions de l'antiquité, considérées principalement dans leurs formes symboliques et mythologiques*, Ouvrage traduit de l'allemand, refondu en partie, complété et développé par J. D. Guigniaut, Treuttel et Würtz, Tome I, I^{ère} partie, 1825, pp. 293-294）.

シュヌの化身であることなど，バラモン教やバラモンの神々との関係に関するものが多いが，そのような情報は読書ノートには記載されていない。

以上見てきたように，読書ノートのなかで，ブッダに関する記述は，ビュルヌフの『インド仏教史序説』，アベル・レミュザの「中国の著者による仏教徒の宇宙形状および宇宙創成に関する試論」，クロイツェルの『古代の宗教』から取られている。これら３つの文献は，典拠とするところがビュルヌフはサンスクリット語の仏典，アベル・レミュザは中国語の経典，クロイツェルはバラモン教を含むさまざまな二次資料である。

このように読書ノートをとりながら，フローベールはブッダを『聖アントワーヌの誘惑』第１稿のプランにも下書き原稿にも記すことはなかった。つまり，ブッダは読書ノートだけで，姿を消してしまったのである。その経緯や理由については，書簡には何も書かれていないので，推測するしかない。ブッダの風貌に関する記載があることから見て，おそらくフローベールは読書ノートをとりながら，ブッダがインドやエジプトの神々と同様にアントワーヌの前に登場する場面を思い描いていたのであろう。しかし下書き原稿にさえ，ブッダの場面がないということは，フローベールが執筆を開始しようとした時点で，頭のなかで構想していた神々登場の場面にはブッダはそぐわない存在だと判断していたことになる。第１稿第３部の最終稿を見てみると，インドの神々が登場した後，悪魔は「あの者たちは死んだ！」と叫んでいるし[31]，他の神々もほとんど死に体の姿であらわれ，悪魔の嘲笑を買うことになる。このように，神々の場面は神的存在の単なる行列ではなく，悪魔が神々はもう死んだも同然の過去の遺物であることをアントワーヌに示すことによって，アントワーヌが信じる神も信仰するに値しないことを説得するための戦略的な場面なのである。

アベル・レミュザの伝える宇宙論（コスモロジー）においては，ブッダあるいはブッダを取り巻く世界は神話的な存在と見られていることは間違いないし，クロイツェルにおいてもブッダはヴィシュヌの化身なのだから，神だと言ってもさしつかえない。それに対して，ビュルヌフの描くブッダは，「犀のように孤独のなかにひきこもる」ブッダであると同時に，「存在論における神の不在および人間の魂の多様性と永遠性，また自然学における永遠の自然の実在という，サーンキア学派の無神論的な教義が彼に示した認識から出発した」[32]というビュルヌフの記述からも分かるように，無神論哲学者でもあり，その意味で過去の神話的存在，宗教的存在とはかなり異なっている。そのようなブッダをいわば死に体の神々の列に入れることは，フローベールにとってためらわれたにちがいない。もちろん，ブッダを別の場面に登場させる手はあったかもしれないが，第１稿を執筆していたフローベールにはそのような考えは浮かんでこなかった。

1849年の『聖アントワーヌの誘惑』第１稿でブッダが消えてしまってから，1850年代，1860

30）« [...] les cheveux sont ceux d'un prêtre ou solitaire bouddhiste ou Djaïna ; la couleur, celle de Crichna et de Vichnou, et elle doit avoir un sens symbolique »（Creuzer, *op. cit*., p. 294 note 3）.
31）« Ils sont morts ! »（Flaubert, *La Tentation de saint Antoine* [première version], in *Première et deuxième Tentation de saint Antoine*, Club de l'Honnête Homme, Tome 9, 1973, p. 250）.
32）« [...] Çâkyamuni [...] partit des données que lui fournissaient les doctrines athées du Samkhya, lesquelles étaient en ontologie l'absence d'un Dieu, la multiplicité et l'éternité des âmes humaines, et en physique l'existence d'une nature éternelle »（Burnouf, *op. cit*. p. 520）.

年代に書かれた作品にもブッダや仏教にかかわる要素は見られない。しかし，書簡のいくつかの箇所では，フローベールが仏教についての記載のある本を読んでいたことがうかがえる。たとえば，1857年12月12日，ルロワイエ・ドゥ・シャントピー宛に，「ルナンの『宗教史研究』を読みましたか。その本を手に入れてください。あなたの関心を引くことでしょう」と書き送っている[33]。『宗教史研究』に収められた「イエスの批判的歴史家たち」のなかで，ルナンは「ブッダ・シャカムニの伝説はその形成の方法によってキリストの伝説と最もよく似ている。ちょうど仏教がその発展の法則によってキリスト教と最もよく似ているのと同様に」と述べている[34]。「イエスの批判的歴史家たち」という論文は，表題が示すように，ダーフィト・シュトラウスなど聖書を批判した歴史家たちを論じているのだが，イエスの起こした奇蹟は「神話」であって史実ではないというシュトラウスの主張を紹介した上で，キリストの伝説とブッダの伝説との類似性を指摘しているのである。

また，1865年12月12日のイポリット･テーヌ宛の書簡においても，仏教が問題になっている。テーヌの『批評および歴史に関する新試論』を贈られたフローベールは，その本に収められたジャン・レイノーの『大地と天』についての論評に対して賛辞を述べた後，「私はあなたの仏教に関する分析にも同じく拍手を送ります」と書いている[35]。「仏教に関する分析」とは，「仏教，ケッペン氏による『ブッダの宗教とその成り立ち』」という論考であるが[36]，これは表題が示すようにドイツの宗教学者カール・フリードリッヒ・ケッペンの『ブッダの宗教』第１巻（1857）にテーヌが論評を加えたものである。テーヌはケッペンの『ブッダの宗教』に沿って，ブッダがバラモン教を母体にして革新的な宗教をつくりあげた過程を追った後，仏教が成立してから５世紀後に興った宗教，つまりキリスト教との比較に触れ，キリスト教は仏教と「ほとんど同じ革新であり，歴史上のあらゆる出来事のなかでこの一致は最も大きな出来事である」と述べている[37]。一方，仏教にはマイナス面もあって，「人間を穏やかにしたと同時に弱くした」とし[38]，仏教によって「人間は操り人形になってしまう」とまで言う[39]。フローベールがテーヌの論考を称賛したのは，このようなキリスト教と仏教との比較に関する記述も含めてのことだと思われる。

とにかく，1844年に刊行されたビュルヌフの『インド仏教史序説』は仏教という未知の宗教を解明しようとする精神にもっぱら貫かれていて，他の宗教のことは視野の外にあったのに対し，その後の20年間に仏教経典の翻訳や研究書が増えるとともに，仏教とキリスト教との比較，さらに仏教とキリスト教との優劣も議論の対象になってきたのである。

33）« Avez-vous lu les *Etudes d'histoire religieuse* de Renan ? Procurez-vous ce livre, il vous intéressera »（*Corr*., Tome II, 1980, p. 785）.
34）« La légende du Bouddha Çakya-Mouni est celle qui ressemble le plus, par son mode de formation, à celle du Christ, comme le bouddhisme est la religion qui ressemble le plus, par la loi de son développement, au christianisme »（Ernest Renan, « Les historiens critiques de Jésus », in *Études d'histoire religieuse*, Michel Lévy, 1857, p. 175）.
35）« J'applaudis mêmement à votre analyse du bouddhisme »（*Corr*., Tome III, 1991, p. 471）.
36）Hippolyte Taine, « Le bouddhisme. *Die Religion des Buddha und ihre Entstehung*, par M. Koeppen », in *Nouveaux essais de critique et de d'histoire*, Hachette, 1865, pp. 317-383.
37）« Cinq siècles plus tard, parmi les frères occidentaux des conquérants de l'Inde, parut, après une élaboration presque semblable, une rénovation presque semblable, et de tous les événements de l'histoire cette concordance est le plus grand »（Taine, *op. cit*., pp. 345-346）.
38）« [...] s'ils ont adouci l'homme, c'est en l'amortissant »（Taine, *op. cit*., p. 375）.
39）« [...] l'homme se réduit à un mannequin »（Taine, *op. cit*., p. 382）.

『聖アントワーヌの誘惑』（1874）におけるブッダ

フローベールの作品のなかでブッダが登場するのは『聖アントワーヌの誘惑』（第３稿）のみである。第１稿を書いてから20年後，1869年６月にフローベールは第３稿のためのノートをとり始める[40]。1869年から翌年にかけて読んだ文献については，書簡を見る限り，キリスト教関係のものが多く，仏教関係は一冊もない。1870年のおそらく春には全体のプランが完成し，1870年７月に執筆開始，1872年６月に清書原稿を書き終える。

執筆前の全体のプランでは全体が九部構成で，その第４部ではアントワーヌがコロッセウムの牢獄やローマの夜の墓地にいる幻を見た後，インドの森に入り込む，次のような場面が想定されている。

> 5◦ Mais le soleil brille, devient très ardent. Une forêt de l'Inde un gymnosophiste,（un bouddha）se brûlant sur un bûcher, sans public. Il explique à St Antoine pourquoi s'unir à Dieu. Antoine le regarde se brûler[41].
>
> （しかし太陽が輝き，燃えるようになる。インドの森，裸形仙人（ジムノソフィスト）（ブッダ）が薪の山の上で，見る人もなくわが身を燃やす。仙人は聖アントワーヌになぜ神と一つになるのかを説明する。アントワーヌは仙人が燃えていくのを見つめる。）

18世紀の『百科全書』の« Gymnosophistes »の項目を見ると，インドの哲学者で，魂の不滅を信じ，「年老いて弱ったとき，彼らはみずから燃えさかる薪の山に身を投じていた」という記載がある[42]。また，« Indiens »の項目では，裸形仙人（ジムノソフィスト）のなかにブッダの名前がある[43]。フローベールが『百科全書』を参照したという確証はないのだが，おそらくこれらの記事を踏まえて，「裸形仙人（ジムノソフィスト）（ブッダ）が薪の山の上でわが身を燃やす」場面を思いついたものと思われる。言うまでもなく，セナリオではブッダは« un bouddha »という不定冠詞がついていて，小文字で始まるかたちであることかも分かるように，歴史上のブッダ，シャカムニではなく，普通名詞としてのブッダ，つまり「目覚めた者」である。しかし，この裸形仙人（ジムノソフィスト）は，テクスト化されると，セナリオとは微妙に異なる様相を見せることになる。決定稿で，裸形仙人（ジムノソフィスト）は「牛の糞を体に塗りつけて，丸裸で，ミイラよりも干からびた」姿で登場し[44]，次のように語る。

> Des flammes sortent de tous les côtés par les intervalles des poutres ; et

40）1869年６月９日の姪のカロリーヌ宛書簡に« Ce qui ne m'empêche pas d'avoir repris les notes de *Saint Antoine* »とある（*Corr*., Tome IV, 1998, p. 51）。
41）BnF, N.a.fr. 23671, f◦ 93.
42）« Lorsqu'ils devenoient vieux & infirmes, ils se jettoient eux-mêmes dans un bûcher embrasé »（*Encyclopédie,* Tome VII, p. 1022）.
43）Cf. note 8.
44）« [...] enduit de bouse de vache, complètement nu, plus sec qu'une momie »（Flaubert, *La Tentation de saint Antoine*, Édition présentée et établie par Claudine Gothot-Mersch, Gallimard, « Folio », 1983, p. 130）. 以下，フォリオ版の『聖アントワーヌの誘惑』を *La Tentation* と略記する。

LE GYMNOSOPHISTE

reprend :

Pareil au rhinocéros, je me suis enfoncé dans la solitude. J'habitais l'arbre derrière moi.

[...]

Comme l'existence provient de la corruption, la corruption du désir, le désir de la sensation, la sensation du contact, j'ai fui toute action, tout contact [...][45].

（炎が薪と薪の隙間から燃え上がる。そして裸形仙人（ジムノソフィスト）は言葉を続ける。

「私は犀のように孤独のなかに入り込んだ。私はうしろの樹に棲んでいた。」

［…］

「存在は腐敗から生じ，腐敗は欲望から，欲望は感覚から，感覚は接触から生じるのだから，私はすべての行為，すべての接触を避けた［…］」。）

裸形仙人（ジムノソフィスト）の言葉「私は犀のように孤独のなかに入り込んだ」は，ビュルヌフの『インド仏教史序説』にある「犀のように孤独のなかにひきこもる」というシャカムニの言葉[46]とほぼ同じだし，次に続く「存在は腐敗から生じ…」も同じく「求めることから愛着（あいじゃく）が生じ，愛着（あいじゃく）からこの世では苦しみが生じる」というシャカムニの言葉を言い換えたものである。ビュルヌフによれば，この言葉は「プラティエーカ・ブッダ」に達した境地，つまり，個人の修行者としてたどりついた境地から発せられたものだが，シャカムニの言葉であることには変わりがない。では，裸形仙人（ジムノソフィスト）の言葉の最後はどうか。

Mais, comme j'ai roulé dans une multitude infinie d'existences, sous des enveloppes de dieux, d'hommes et d'animaux, je renonce au voyage, je ne veux plus de cette fatigue ! [...] et, pour ma récompense, je vais enfin dormir au plus profond de l'absolu, dans l'Anéantissement[47].

（「しかし，私は，神々や人間や獣の外観のもと，無限に多様な存在の間を経巡ってきたのだから，旅はやめて，もうこのような疲労は御免蒙りたい。［…］それに報いるために，私は絶対の最も深きところ，「寂滅」のなかにようやく眠ろうとしている。」）

裸形仙人（ジムノソフィスト）はさまざまな存在を経巡って，そのような輪廻の旅から逃れるために，われとわが身を燃やして「寂滅」« Anéantissement »のなかに眠ろうとする。ビュルヌフは「シャカムニが人々にもたらした希望は，彼がニルヴァーナと呼ぶもの，即ち寂滅（anéantissement）に入ることによって，輪廻の法から逃れる可能性であった」とニルヴァーナについて説明し[48]，フ

45）*La Tentation*, p. 130.
46）Cf. note 17.
47）*La Tentation*, p. 131.
48）Cf. note 24.
49）Cf. note 20.

ローベールも第１稿の準備のための読書ノートに書き留めていた[49]。裸形仙人（ジムノソフィスト）の死は，仙人自身の言葉によれば« anéantissement »なのだから，シャカムニの言うニルヴァーナと同じことになる。ただし，シャカムニがニルヴァーナによって輪廻から逃れる希望を人々に与えたのに対し，裸形仙人（ジムノソフィスト）の言葉にはそのような意味合いはなく，全面的に個人的な入滅なのである。セナリオでは「神と一つになる」とあるところを見ると，仙人の入滅はバラモン教で言うニルヴァーナと同じだと考えることができるが，ビュルヌフはバラモン教のニルヴァーナには「解放」« délivrance »という語をあてていて，仏教のニルヴァーナとは厳密に区別している[50]。このように，裸形仙人（ジムノソフィスト）の場面は一種不思議な場面であって，表面的にはインドの森でみずから火のなかに身を投じて輪廻を脱する行者でありながら，語る内容は，ビュルヌフの『インド仏教史序説』にあるシャカムニの言葉，シャカムニの考えるニルヴァーナに則っているのである。セナリオにあった« un gymnosophiste,（un bouddha）»の« un bouddha »は，任意のブッダではなく，シャカムニの一つの姿，「プラティエーカ・ブッダ」を意味しているのかもしれない。

フローベールは1871年４月30日に裸形仙人（ジムノソフィスト）に先立つ墓地の場面を書き始めたことを姪のカロリーヌに伝えているので[51]，裸形仙人（ジムノソフィスト）の場面が同年５月に書かれたことは間違いない。この時点では，第５部の神々の登場の場面には，セナリオが示すように[52]，ブッダ（シャカムニ）があらわれることは想定されていなかったのである。ところが，第５部の神々の場面の執筆に入った６月から７月にかけて，ブッダ登場の場面を入れるために，急に資料を探し始める。

まず書簡に沿って，ブッダ登場の経緯を見ていこう。1871年６月14日には姪のカロリーヌに，パリのデュプラという書店に行って「フーコーが翻訳しているのだと思うのだが，『妙法蓮華経』を頼んでくれ」と頼んでいる[53]。『妙法蓮華経』（法華経）をフランス語訳したのはフーコーではなく，ビュルヌフである[54]。ビュルヌフの弟子であるフィリップ・エドゥアール・フーコー（1811～1894）がチベット語写本から訳したのは『ラリタヴィスタラ』（普耀経）である[55]。『ラリタヴィスタラ』と『妙法蓮華経』を読了したことを６月24日にアルスナル図書館の司書であるフレデリック・ボードリ宛の手紙に書く一方[56]，同じ手紙で，バルテルミー＝サン＝ティレールの本をアルスナル図書館に探しに行くと伝えている[57]。また，同じ６月24日の手紙でフローベールは「私に欠けているのは仏教の神学，ブッダの教義そのものです」とも書き[58]，さらなる文献に関する情報をボードリに求めている。ところが，７月５日の姪のカロリーヌ宛書簡で，

50）« [...] la théorie [...] de Nirvâna ou de la délivrance, laquelle appartenait en général à toutes les écoles brâhmaniques »（Burnouf, *op. cit*. p. 521）.
51）« J'ai commencé ce soir la description d'un petit cimetière chrétien où les fidèles viennent pleurer les martyrs »（*Corr*., Tome IV, p. 316）.
52）第５部のセナリオはBnF, N.a.fr. 23671, f° 95.
53）« Fais-moi le plaisir de te transporter chez Benjamin Duprat, libraire [...], et demande-lui *Le Lotus de la Bonne Loi*, traduit, je crois, par Foucaux »（*Corr*., Tome IV, p. 334）.
54）*Le Lotus de la bonne loi* : traduit du sanscrit, accompagné d'un commentaire et de vingt et un mémoires relatifs au buddhisme par Eugène Burnouf, Imprimerie nationale, 1852.
55）*Rgya Tch'er Rol Pa*（*Lalitavistâra*）*, ou Développement des jeux, contenant l'histoire du Bouddha Çakya-Mouni*, Traduit sur la version tibétaine du Bkahhgyour, et revu sur l'original sanscrit par Philippe-Édouard Foucaux, Imprimerie royale, 1848. 以下，フーコーが訳したこの経典を*Lalitavistâra*と略記する。
56）« J'ai lu le *Lalitavistâra*, ô Bodhisattva, j'ai lu *Le Lotus de la Bonne Loi*, ô fils de famille ! »（*Corr*., Tome IV, p. 339）.
57）« Bref j'enverrai à la fin de la semaine prochaine chercher chez vous le Barthélemy-Saint-Hilaire »（*Ibid.*）.
58）« [...] ce qui me manque surtout, c'est la théologie du bouddhisme, la doctrine même de Bouddha »（*Ibid.*）.

バルテルミー＝サン＝ティレールの『仏教の歴史』をルーアンの書店に取りに行かせると書く一方で[59]，ブッダの場面を書き終えたことを伝えている[60]。一つの場面を執筆するのに十分な準備をととのえるのが普通であるフローベールにしては珍しく，文献の探索を始めてから20日ほどでブッダの場面を書き終えたのである。

フローベールがブッダを神々の場面を入れようと思った理由については書簡には書かれていないものの，決定稿を見ればある程度推測することができる。ブッダがアントワーヌとイラリオンの前に登場して語り始める場面。

Pour délivrer le monde, j'ai voulu naître parmi les hommes. Les dieux pleuraient quand je suis parti.

J'ai d'abord cherché une femme comme il convient [...] ; et au temps de la pleine lune, sans l'auxiliaire d'aucun mâle, je suis entré dans son ventre.

J'en suis sorti par le flanc droit. Des étoiles s'arrêtèrent.

HILARION

murmure entre ses dents :

« Et quand ils virent l'étoile s'arrêter, ils conçurent une grande joie ! »

Antoine regarde plus attentivement

LE BOUDDHA

qui reprend :

Du fond de l'Himalaya, un religieux centenaire accourut pour me voir.

HILARION

« Un homme appelé Siméon, qui ne devait pas mourir avant d'avoir vu le Christ[61] ! »

（世を救うために，私は人間のうちに生まれることを欲した。私の出発のとき，神々は泣いた。

まず私はしかるべき女性を探した。［…］そして，満月のとき，いかなる男の助けもかりずに，私はその胎内に入った。

私はその右のわき腹より生まれ出た。星々は歩みを止めた。」

イラリオンは歯のあいだでつぶやく。「そして彼らは星が止まるのを見て，喜びにあふれた。」

アントワーヌはより注意深く仏陀を見つめる。ブッダは言葉を継ぐ。「ヒマラヤの奥より，百歳の僧が私を見に駆けつけた。」

イラリオン「シメオンという男はキリストに会うまでは死ぬはずがないとされていた。」）

ブッダはボーディサットヴァ（目覚める者）からブッダ（目覚めた者）へと至る過程を語っ

59）« J'enverrai demain Émile à Rouen chercher *L'Histoire du bouddhisme* de Saint-Hilaire, car d'après ta lettre de ce matin, le livre doit être maintenant chez Pilon ? »（*Corr*., Tome IV, p. 346）.

60）« J'en ai, enfin, fini avec le Bouddha ! »（*Corr*., Tome IV, p. 347）.

61）*La Tentation*, p. 166.

62）« Cependant ces fils des dieux Touchitakâyikas tenant embrassés en pleurant les pieds du Bôdhisattva [...] »（*Lalitavistâra*, p. 51）.

ていくのだが，その話はすべて『ラリタヴィスタラ』から取られている。『ラリタヴィスタラ』では，まずトゥシタ天（兜率天（とそつてん））にいるボーディサットヴァが人間界に降りていくことが語られ，出発のとき「トゥシタ天の神々の息子たちは泣きながらボーディサットヴァの両足を抱く」[62]。そして，「ボーディサットヴァは［…］十五日目，満月の日に［…］母親の胎内に入り」[63]，「ようやく十ヵ月が経って，彼は母親の右の脇腹から出た」[64]。『ラリタヴィスタラ』では，ボーディサットヴァが誕生する前兆として「太陽と月，巨大な天空の住まい，惑星，星々の群れが動きを止めた」となっているのが[65]，『聖アントワーヌの誘惑』では「星々は動きを止めた」と単になっている。そこに「そして彼らは星が止まるのを見て，喜びにあふれた」というイラリオンの言葉がさしはさまれる。このイラリオンの言葉は，フォリオ版の注でゴトー＝メルシュが指摘しているように，『マタイによる福音書』で東方三博士が星の止まった場所で幼子イエスを見つけるエピソードを踏まえている[66]。フローベールのテクストにある次のブッダの言葉「ヒマラヤの奥より，百歳の僧が私を見に駆けつけた」も，『ラリタヴィスタラ』第７章でのヒマラヤの中腹に住むアシタという賢者が人間界に生まれたボーディサットヴァを見にやってくる逸話をもとにしているが[67]，それに対してもイラリオンは『ルカによる福音書』のシメオンという男が幼子イエスを見にやってきた話を付け加える[68]。要するに，ここで，『ラリタヴィスタラ』に語られたブッダの生涯と，福音書に語られたイエス・キリストの生涯との共通性が，ブッダとイラリオンの言葉によって提示されているのである。ただし，その提示の仕方は多少恣意的とも言えるものであり，たとえば，ボーディサットヴァが生まれるときに星々が動きをとめたことは，『ラリタヴィスタラ』では生誕の前触れとなる32の奇蹟のうちの一つにすぎず，五百頭の白い象がやってきて鼻で父王の足に触れてとどまった話[69]などは捨象されている。『ラリタヴィスタラ』に語られたブッダの生涯のうちイエス・キリストにも共通する箇所が抜き出された結果，『聖アントワーヌの誘惑』に登場するブッダにはインド的，アジア的な色彩が乏しい。

おそらくフローベールは第４部の最後にイエス・キリストに匹敵するものとしてアポロニウスを描いた後，第５部の神々の場面にも明確にイエスの対抗者となるものを入れようと思ったにちがいない。そのとき念頭に浮かんだのは，ルナンやテーヌの著作でイエスの先駆者として描かれたブッダであったことは間違いがない。第５部で登場するブッダは，最初からイエス・キリストの対抗者としての役割を負わされているのである。

63）« [...] le Bôdhisattva [...], et le quinzième jour, celui de la pleine lune [...] entre dans le sein d'une mère »（*Lalitavistâra*, p. 30）.
64）« Enfin, à l'accomplissement des dix mois, il sortit du côté droit de sa mère »（*Lalitavistâra*, p. 87）.
65）« [...] le soleil et la lune, les immenses demeures（célestes）, les planètes, la foule des étoiles cessèrent de se mouvoir »（*Lalitavistâra*, p. 81）.
66）マタイ2：9-10「彼らが王の言葉を聞いて出かけると，東方で見た星が先立って進み，ついに幼子のいる場所の上に止まった。学者たちはその星を見て喜びにあふれた」（*La Tentation*, p. 303, note 99）。
67）« En ce temps-là, sur le flanc de l'Himavat（Himâlaya）, le roi des montagnes, un grand Rîchi, nommé Asita（noir）, possédant les cinq sciences transcendantes [...] »（*Lalitavistâra*, p. 103）.
68）ルカ2：25-26「そのとき，エルサレムにシメオンという人がいた。この人は正しい人で信仰があつく，イスラエルの慰められるのを待ち望み，聖霊が彼にとどまっていた。そして，主が遣わすメシアに会うまでは決して死なない，とのお告げを聖霊から受けていた」（*La Tentation*, p. 303, note 100）。
69）« Cinq cents jeunes éléphants blancs étant venus, touchèrent les pieds du roi Çouddhôdana avec leurs trompes, et demeurèrent [...] »（*Lalitavistâra*, p. 80）.

以上見てきたように，『聖アントワーヌの誘惑』にはいわば二人のブッダが登場していることになる。ただし，第４部で登場するのは，インドの森でわれとわが身を焼く裸形仙人（ジムノソフィスト）でありながら，シャカムニの言葉を話す奇妙なブッダ，影のようなブッダである。それに対して，第５部でアントワーヌとイラリオンの前にあらわれるブッダは，「私はブッダになった」とはっきり言うことからも分かるように[70]，正真正銘のブッダなのである。しかし，第５部のブッダには裸形仙人（ジムノソフィスト）のもっていたインドの土俗性はなく，イエス・キリストとの共通性を多くもつ超越的な存在である。

第５部で登場するブッダは，明らかに1850年代，60年代にルナンやテーヌが取り上げたブッダとイエス・キリストとの類似性の指摘，さらには両者の優劣論議（つまり仏教とキリスト教との優劣に関する議論）を踏まえている。一方，第４部で裸形仙人（ジムノソフィスト）のなかに潜むブッダの方は，1840年代，フローベールが24歳のとき，ビュルヌフの『インド仏教史序説』にある「犀のように孤独のなかにひきこもる」という言葉に惹かれ，孤独な状況で共感をおぼえたブッダが出発点になっている。第４部で裸形仙人（ジムノソフィスト）が同時にブッダでもあるのは一見奇妙ではあるが，それはおそらくフローベールが24歳のときに共感したブッダの言葉，正確に言えば「プラティエーカ・ブッダ」の言葉を『聖アントワーヌの誘惑』のなかによみがえらせようとしたのであろう。「個人的なブッダ」は第５部の神々の列にはそぐわないので，第５部では「世を救うために」やってくるブッダが[71]，『ラリタヴィスタラ』という経典から引き出されて，イエス・キリストのライバルとなったのである。

『ブヴァールとペキュシェ』における仏教

遺作『ブヴァールとペキュシェ』でも，仏教が問題になる場面がある。第９章で，熱心なキリスト教の信者となったブヴァールとペキュシェは，神学書の研究に没頭するうちに教義の矛盾点が気になり始め，ジュフロワ神父と衝突するようになり，やがてペキュシェはシャヴィニョルの町の人々の前で，自分は仏教徒になると宣言する。

ルーアン市立図書館にはフローベールが『ブヴァールとペキュシェ』のために作成した読書ノートや文書が８巻に綴じられて保存されている[72]。そのなかで引用された多くの文献のうち仏教およびブッダに直接言及したものは，ジュール・バルテルミー＝サン＝ティレール（1805-1895）の『ブッダとその宗教』一冊のみである[73]。フローベールは1871年７月に『聖アントワーヌ』のブッダ登場の場面のためにバルテルミー＝サン＝ティレールの本を探しているので，『ブッダとその宗教』もそのときに読んだのかもしれないし，1872年７月から1874年７月までの『ブ

70）« Je devins le Bouddha ! »（*La Tentation*, p. 169）.
71）Cf. note 61.
72）Bibliothèque municipale de Rouen（以下，BmR と略記）, Ms g 226[1-8], 2216 ff. これらの草稿は Stéphanie Dord-Crouslé らによって電子化されて，以下のサイトで閲覧することができる：http://dossiers-flaubert.ish-lyon.cnrs.fr/.
73）Jules Barthélemy-Saint-Hilaire, *Le Bouddha et sa religion*, Nouvelle version, Didier, 1862.

ヴァールとペキュシェ』の準備期間に読んだのかもしれない。とにかく，読書ノートで『ブッダとその宗教』が引用されているページを見てみよう。

— Sottise des critiques
Religions Le Bouddha et sa religion. Barthélemy St Hilaire.
“Doctrines étranges et déplorables”（II）
“Tentative religieuse, déraisonnable dans son principe”
[...]
Pauvre Bouddhisme que Mr B. St-H. condamne sans pitié[74] !
（批評の愚かさ
宗教 『ブッダとその宗教』バルテルミー＝サン＝ティレール
「奇妙で嘆かわしい教義」（Ⅱ）
「宗教の試み，その原則において不合理」
〔…〕
かわいそうな仏教！バルテルミー＝サン＝ティレールは仏教を容赦なく断罪している。）

ルーアン市立図書館の読書ノートには，フローベールが1877年12月４日の姪のカロリーヌ宛の手紙で述べているように[75]，やがては『ブヴァールとペキュシェ』第２巻となるように，表題がつけられて，ある程度整理されている。この読書ノートも，「批評の愚かさ」という表題がつき，「宗教」という項目があって，そこにテーマでまとめられたものであり，最初に『ブッダとその宗教』の序論の２頁目と４頁目から，仏教の奇妙さ，嘆かわしさ，不合理さを指摘した箇所の引用がある[76]。引用は省略したが，その次に同書の72頁，140頁からの引用があり，その後に「かわいそうな仏教！」という書き込みがある。この書き込みはフローベールによるものであり，バルテルミー＝サン＝ティレールの仏教に対する過度の批判に対して漏らした感想であろう。

上記の読書ノートからはバルテルミー＝サン＝ティレールの批判の激しさはうかがえるものの，彼が仏教をどのように位置付けていたのかは分かりにくい。彼の仏教批判の根本にあるものを知るためには，『ブッダとその宗教』第２版につけられた「緒言」（Avertissement）の冒頭の数行を見る方がよいと思われる。

ビュルヌフの後で私がおこなった仏教のニルヴァーナについての解釈は，批判の的と

74）BmR, Ms g 226[4], f° 58.
75）« Après le dîner nous classerons quelques documents de la seconde partie »（*Corr*., Tome V, p. 335）. 12月9日の手紙では « second volume » と表現される（*Ibid*., p. 339 ）。
76）« [...] l'on trouvera l'explication de son impuissance dans les doctrines étranges et déplorables qu'elle a professées »（Barthélemy-Saint-Hilaire, *op. cit*., p. II）; « Cette tentative religieuse, quelque déraisonnable qu'elle soit dans son principe [...] »（*Ibid*., p. IV）.

なった。私はそのことに驚きはしない。虚無の信仰が宗教になり，それがさまざまな変化を経て，今日もなお人類の４分の１，ことによると３分の１が信仰を公言している事実は異常なことであり，この事実がまず驚きを，ほどなくして否定をひきおこしたのは当然であろう。虚無を崇拝するとは，ほとんど理解しがたい[77]。

「ビュルヌフの後で」というのは，バルテルミー＝サン＝ティレールが単にビュルヌフの弟子であるということだけではなく，「仏教のニルヴァーナについての解釈」，つまりニルヴァーナが« anéantissement »だというビュルヌフの解釈を受け継いだことも意味している。ただし，ビュルヌフによれば，ブッダはニルヴァーナによって人々に輪廻から逃れる希望の道を示したのだが，バルテルミー＝サン＝ティレールは« anéantissement »であることのみを強調し，仏教が「虚無の信仰」であると断言する。仏教が今なお多くの信者をもっていることはまず「驚き」を，次いで「否定」を引き起こしたと彼は言う。

清書原稿ではどうなっているのか，ペキュシェが仏教にも好意をもっていると宣言したときの町の人々の反応から，問題の場面を見ていこう。

Mme de Noaris leva les bras. ― « Le Bouddhisme ! »

― « Comment, ― le Bouddhisme ? » répétait le comte.

― « Le connaissez-vous ? » dit Pécuchet à M. Jeufroy, qui s'embrouilla.

― « Eh bien, sachez-le ! mieux que le christianisme, et avant lui, il a reconnu le néant des choses terrestres. Ses pratiques sont austères, ses fidèles plus nombreux que tous les chrétiens, et pour l'incarnation, Vischnou n'en a pas une, mais neuf ! Ainsi, jugez ! »

― « Des mensonges de voyageurs » dit Mme de Noaris.

― « Soutenus par les francs-maçons » ajouta le curé.

Et tous parlant à la fois : ― « Allez donc ― Continuez ! ― Fort joli ! ― Moi, je le trouve drôle ― Pas possible » si bien que Pécuchet exaspéré, déclara qu'il se ferait bouddhiste[78] !

（ノアリス夫人は両腕を挙げた。「仏教！」

「何，仏教？」と伯爵は繰り返した。

「仏教をご存知ですか？」とペキュシェがジュフロワ司祭に言うと，司祭はまごついた。

「それでは，仏教のことを知ってください。キリスト教よりも立派で，キリスト教より前に，地上の物事の虚無を認めています。お務めは厳格だし，信者の数もすべてのキリスト教徒よりも多いし，化身について言えば，ヴィシュヌは１回ではなく，９回です。これ

77）« On a beaucoup contesté l'interprétation qu'après Burnouf j'ai donnée du *Nirvâna* bouddhique. Je ne m'en étonne pas. Le culte du néant, devenu une religion que professe encore aujourd'hui avec des modifications diverses le quart ou peut-être le tiers de l'humanité, c'est là un fait tellement extraordinaire qu'il a dû provoquer tout d'abord la surprise, et bientôt la négation. Adorer le néant ! Cela se comprend à peine »（*Ibid*., p. i）.

78）Flaubert, *Bouvard et Pécuchet*, Édition présentée et établie par Claudine Gothot-Mersch, Gallimard, « Folio », 1979, pp. 365-366.

で，ご判断ください。」

「旅行家の嘘っぱちですよ」とノアリス夫人は言った。

「秘密結社に後押しされた旅行家のね」と司祭がつけ加えた。

すると皆が同時にしゃべりだした。「さあさあ」「続けて」「とても面白い」「それはおかしいと思うが」「ありえん」そうこうするうちにペキュシェはかっとなって，自分は仏教徒になると宣言した。）

ペキュシェが仏教のことを持ち上げたときの町の人々の反応は，バルテルミー＝サン＝ティレールの指摘と同様に，最初は「仏教！」「何，仏教？」という驚き，次に「嘘っぱち」「ありえん」という否定である。ペキュシェの反論も，「地上の物事の虚無」は『ブッダとその宗教』の「虚無の信仰」と共通するし，信者の数の多さも『ブッダとその宗教』の「人類の４分の１，ことによると３分の１」の言い換えである。また，キリスト教との比較は，ルナンやテーヌの仏教とキリスト教との優劣論争を踏まえているし，ヴィシュヌの化身に関しては，クロイツェルの『古代の宗教』にバラモン教徒はブッダがヴィシュヌ神の９番目の化身であると信じているという記載があり[79]，それに則っている。要するに，この場面はその大枠をバルテルミー＝サン＝ティレールの著作から借り，そこに他の著作の言説を嵌め込んだものなのである。ただし，ペキュシェの仏教擁護論には不正確な点がいくつかある。「地上の物事の虚無を認めた」という発言があるが，ビュルヌフの『インド仏教史序説』によれば，ニルヴァーナ（つまり« anéantissement »）に達することによって輪廻を脱するということであって，最初から地上の物事が無であるということではない。また，ヴィシュヌの化身に関しても，クロイツェルの『古代の宗教』では，ヴィシュヌ神はブッダに化身した後，未来において10番目の化身をとげることになっているし[80]，そもそもビュルヌフは，ブッダが無神論的な認識から出発していると述べているのだから[81]，ペキュシェがインドの神を引き合いに出すこと自体おかしいのである。明らかに，ペキュシェは仏教について語る際に必読文献とも言うべきビュルヌフの『インド仏教史序説』を読まず，仏教擁護論を展開している。

ペキュシェは「仏教徒になる」と皆に宣言しながらも，それ以降は仏教徒になるどころか，仏教に関する本を読むこともまったくせず，ヴィクトルとヴィクトリーヌという二人の孤児の教育に熱を上げていく。彼が「仏教徒になる」と宣言したのは，キリスト教に対して何の疑問をもたない町のブルジョワたちへの反撥があったことは言うまでもないが，フローベールがバルテルミー＝サン＝ティレールの読書ノートをとっていて記した「かわいそうな仏教！」があらわすように，仏教への同情あるいは憐憫の情もあったことがうかがえる。

79）« [...] les Brahmanes s'accordent aujourd'hui encore à compter Bouddha parmi les incarnations de Vichnou ; ils en font la neuvième »（Creuzer, *op. cit.*, p. 287）.

80）« La dixième incarnation, *Calkivatara*, est encore à venir »（Creuzer, *op. cit.*, p. 190）.

81）Cf. note 32.

結びに

以上，フローベールと仏教の関係を20歳代から晩年にいたるまで追ってきたが，彼が仏教に少なからず関心をもっていたことは事実としても，彼が仏教信者になったとか，仏教の研究にのめり込んだということはまったくない。仏教に関する文献を探し求めたのは，大抵の場合，『オリエントの物語』や『聖アントワーヌの誘惑』といった作品の準備のためであった。もし，本当に仏教を研究する気があったならば，1848年に出版されたフーコー訳『ラリタヴィスタラ』や1852年のビュルヌフ訳『妙法蓮華経』を，1871年になって初めて読むことはなかったであろう。そのような消極的な関心のなかで，ほとんど唯一フローベールを魅了したのは，ビュルヌフの『インド仏教史序説』であった。24歳のときに，同書にあるブッダ（正確に言えば「個人的なブッダ」）の「犀のように孤独のなかにひきこもる」という言葉，またブッダがニルヴァーナが« anéantissement »であるというビュルヌフの説明に惹きつけられたフローベールは，『聖アントワーヌの誘惑』第１稿にはブッダを登場させなかったものの，第３稿では裸形仙人（ジムノソフィスト）の語る言葉のなかにかつてビュルヌフの本にあった要素を組み込んでいく。一方，『ブヴァールとペキュシェ』第９章では，バルテルミー＝サン＝ティレールの仏教批判を基盤にして，ルナンやテーヌなどの言説を取り込みながら，仏教にかかわる場面がつくられていて，ビュルヌフは排除されている。ペキュシェがビュルヌフの著作を読んでいない設定にしたのは意図的であって，ペキュシェの言説も，バルテルミー＝サン＝ティレールの読書ノートの表題にあった「批評の愚かさ」を示すものと考えられる。つまりバルテルミー＝サン＝ティレールの仏教批判と同様に，ペキュシェのキリスト教批判，ひいては基本文献も読まない思いつきの仏教擁護も「愚かさ」のひとつにすぎないということなのである。

本論冒頭で述べた仏像と，それを「私のブッダ」と呼ぶフローベールの書簡をあらためて見てみると，そこに浮かび上がるのは「信仰」ではなく，「愛着」という言葉であろう。ビュルヌフが「苦しみが愛着（あいじゃく）から生じることを認めた者は，犀のように孤独のなかにひきこもる」というブッダの言葉を引いているように[82]，愛着（あいじゃく）« attachement »は煩悩の一つであるが，フローベールはそれも分かっていて，「私のブッダ」に「愛着」をもったように思われる。仏像への愛着は，24歳のフローベールが共感した「個人的なブッダ」の言葉につながっているのである。

82）Cf. note 18.